

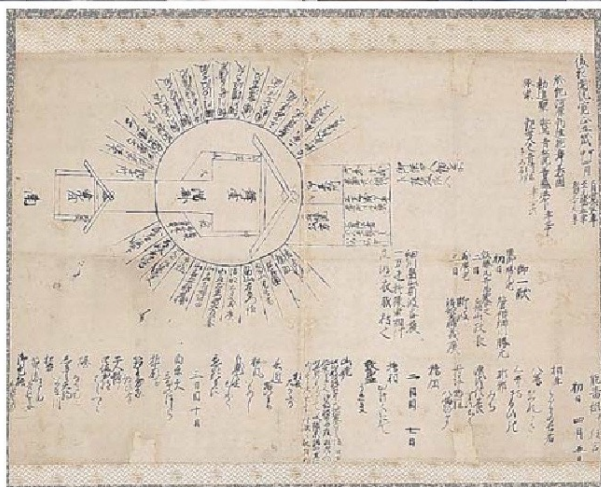
# 勸進猿楽復活へ機運

550年前、当時の将軍足利義政も来場して盛大に行われた能の公演「大ながら糺河原勸進猿楽」を復活させようと、下鴨神社（京都市左京区）などが取り組みを始めた。同神社の「式年遷宮」の奉祝行事の一環として、来春にも境内で開く計画で、新木直人宮司は「勸進猿楽の復興は長年の念願だった。ぜひ実現させ、神社と市民を結ぶきっかけにしたい」と意気込む。

「糺河原勸進猿楽」は、14 64（寛正5）年4月、鞍馬寺 又三郎と、その父音阿弥が、8 流れる鴨川の「糺河原」に舞台（同区）の造営費用を集める 代将軍義政の後援を受けて開 を設け、3日間にわたって開か



① 糺河原勸進猿楽の再興について思いを語る関係者ら（京都市左京区・下鴨神社） 撮影 坂本佳文  
② 観世宗家所蔵の「糺河原勸進猿楽舞台台敷敷図」。舞台の周りに並ぶ大名の配置から、当時の力関係がうかがえる（観世文庫提供）



## 下鴨神社 「念願、市民ぐるみで」

観世家には当時の番組とともに、将軍や諸大名が座った配置を图示した「舞台台敷敷図」が残されている。能楽研究で知られる松岡心平東京大教授は「大名の配置を見るだけで、当時の権力構造さえ読み取れるような大きなイベント。観世流隆盛の出発点となった公演とも言え、能楽の歴史においても重要な出来事」と説明する。

復活の取り組みは、新木宮司が発案し、松岡教授と観世流二十六世宗家の観世清河寿さんが協力する。境内の重要文化財「橋殿」を能舞台として、薪能の形式で開く計画だ。近く実行委員会を発足させ、講演会などを通じて市民にも広く理解を求めながら、実現に向けて具体的な内容を詰めるという。

清河寿さんは「能楽は鎮魂と癒やしの芸能。世の中が混沌とした時代を迎えるなか、その原点を見直すような場を持つことができれば、非常に意義深い」と話している。